茶道文化選書

中国喫茶詩話

竹内　実　著

淡交社刊

著者略歴
竹内　実（たけうち・みのる）
大正12年、中国生れ
京都大学文学部卒業
京都大学人文科学研究所教授（現代中国部門）
主著『毛沢東　その詩と人生』（共著・文芸春秋社）『毛沢東ノート』（新泉社）『現代中国の文学』（研究社）『中国への視角』（中央公論社）『中国の思想』（日本放送出版協会・NHKブックス）『友好は易く理解は難し』（サイマル出版会）『魯迅遠景』『魯迅周辺』（田畑書店）『華味三昧』（共著・講談社）他

中国喫茶詩話　　竹内　実著

昭和57年1月26日　初版発行　　**¥ 2,500**

発行者　　納屋嘉治

発行所　　株式会社 淡交社
本　社　京都市北区堀川通鞍馬口上ル
支　社　東京都千代田区麹町4の4
振替京都5-4578

印　刷　日本写真印刷株式会社
製　本　大日本製本紙工株式会社

©1982　竹内　実　　Printed in Japan

4363

ISBN4-473-00791-X C0398 ¥2500E

目次

序——茶の天地 5

I 詩にみる茶のさまざま

1 喫茶のはじまり——『詩経』の詩・西晋の賦 12
2 唐代の茶会と日本への伝来——『経国集』の詩 23
3 仙境にあそぶ茶——怪なる詩人・盧仝 29
4 友情を味わう茶——白楽天の詩・一 46
5 睡後と酔後の茶——白楽天の詩・二 57
6 早春の茶——白楽天の詩・三 70
7 白瓷と青瓷——秘色越器の詩 77
8 酷税と山野の茶——袁高の茶山詩 90
9 春雨に分れる茶——陸放翁の詩 96
10 試院に聴く松風の鳴——蘇東坡と茶 102
11 遊戯の茶——楊万里の分茶の詩 111
12 蒼茫万古の意——高青邱の詩と茶 119
13 竹林の茶を煮る香り——倪雲林の画と詩 139

II 小説に描かれた喫茶の情景
1 英雄豪傑と茶店——『三国志演義』『水滸伝』 158
2 飲食と茶——『金瓶梅』『西遊記』 167
3 仙人になる茶・梅花の雪の茶——『紅楼夢』 179
4 西湖、秦淮の茶——『儒林外史』 191
5 悟りの茶・官僚社会の茶——『老残遊記』『官場現形記』 205
6 近代・現代の茶店と茶——『暴風雨前』 217
III 喫茶紀行
1 文山紀行と功夫茶 226
2 西湖と虎跑泉 240
参考地図 260
あとがき 262

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序——茶の天地

茶を詠じた中国の詩は、まことに多い。

茶を味わうとき、詩が生まれ、詩をつくるとき、詩人の感興をたすける茶があった。

詩が生まれずとも、茶は詩の領域に属していたにちがいない。

しかしまた、茶は、ひたいに汗をにじませる日常のなかにあって、ひとびとを憩わせ、次の仕事にむかうはずみでもあったろう。

このような茶の諸相は、詩にうたわれ、小説のなかに描かれている。文芸作品のなかで、ひとびとに愛好されていることによって、茶はいっそう親しみやすいものになっている。

そこで、そうした文芸作品にみえる飲茶、喫茶の情趣を眺め、ひるがえって、その作品の天地を逍遙することを試みようとおもいたった。手でさぐるようにして、詩集や古典小説を読み、また文献を渉猟し、そのような作品や場面を探しては訳出し、茶の流れに関連させることをつづけた。

とはいえ、茶は文芸作品のなかにばかりあるのではない。「茶館」という、茶店のようなものがあって、日常の暮らしに、きりはなせない。

じつは、わたしは、中国で少年期をすごしはしたが、茶館へはいったことはないにもかかわらず、しばらくまえから、しきりに、茶館をなつかしく想像するようになった。

なぜだろうか。われながら不思議である。

新しい中国が生まれて、十何年ぶりに、天津までいった。公園へいくと、園丁が作業中、脱いだ上衣の胸ポケットに万年筆がさしてあった。以前の中国では、労働者が万年筆をもつなど、想像もつかないことである。

だが、公園では、旧中国のままの情景をもみた。公園の一隅に、テントを張って日陰をこしらえ、そこに粗末

なテーブルと椅子が並べてあった。つまり、「茶館」であるわけだが、そこで老人がふたり茶を啜り、語りあっていた。公園を一周してもう一度その傍をとおると、さっきとおなじように、悠々と茶を啜り、語るともなく語っていた。その気分が、たまらなくよかった。

それから四、五年して、幸運にも四川省を旅行する機会にめぐまれ、成都では郊外の杜甫草堂を訪ねた。手洗いを探して、ひとりであちこち歩きまわっていると、ふと大きなお堂にはいりこんでしまったが、そこには数多くの中国式の椅子、テーブルが排列され、ひとびとが静かに茶を啜っていた。いま考えると、近くの寺の本殿かなにかだったのではないか、とおもわれる。

自動車の窓からみた市内にも、営業中の「茶館」がいくつかあった。どうしてあのとき、あそこで、お茶を味わってみなかったか、このごろになってくやまれる。

しかし、それから二、三年して中国を訪ねたさい、蘇州の寒山寺では、寺の入口に近い休憩所でお茶を飲んだ。二階だった。窓の外を、大きな白い帆が静かに右から左へ移動していく。このあたりに多い河、水路をゆく船であるが、農作物や建物のかげになって船頭も船体もみえず、ただ白い帆だけが、時間の経過と調子をそろえるようにして、音もなく動いていくのだった。

そのときから足かけ二十年、中国現地とはご無沙汰をしたが、この静かに移動する白い帆は、ときおり眼前に浮かんだ。

一九七九年(昭和五十四年)、蘇州を再訪し、寒山寺へいったが、思い出の休憩所は閉ざされていて、あたりに白い帆もなかった。

中国大陸を（新中国になって）旅行するひとは列車のなかで、「茶館」の気分を味わうことができる。コンパートメントの窓ぎわの小さなテーブルのうえに、キャラメルの包みのような感じで、お茶の葉がおいてある。それを蓋つきの大きな湯呑み（このごろビールのおまけについてくる、ジョッキぐらいの大きさ）にいれて待っていると、ボーイさんがまわってきて、熱い熱いお湯を注いでいく。しばらくすると、お茶の葉が沈む。それから飲む。ころあいをみはからって、またボーイさんが熱い熱いお湯を注ぎにくる。寒い冬はいうまでもないが、暑い夏でも奇妙に、この熱いお茶が暑気をはらう。

これが「茶館」だと、客はまずお茶の葉を一包み買うわけであるが、テーブルに座っていると、湯呑みと熱湯のはいった急須を、ボーイがもってきてくれる。急須のお湯がなくなると、大きなやかんから、お湯を足してくれる。

ボーイの「芸術」が発揮されるのは、そのときである。

ボーイは、やかんの口を急須のすぐうえにもっていったりしない。自分の胸のあたりでやかんを傾け、日本の手品師がよくやる水芸のように、お湯をやかんの口から急須まで飛ばすのである。

アラブの国にも、「マカーヒ」という紅茶を飲む場所があって、ポットからお茶をカップに注ぐときの「芸術」があるのだという。

こちらは、初めポットの口をカップにつけておいて、高くひきあげていくのだそうである。

お茶でも、コーヒーでも、いちどそのような場で飲んでみたいとおもうのは、わたしだけだろうか。

かつて、ほぼ五年にわたって書きついだものを、このようにまとめた。図版や写真はいくらか割愛しなければならなかったが、新しく書き加えた部分もある。さらに、全体をおおむね時代の流れに沿うように編みなおした。

とはいえ、気ままな散歩の感があった雑誌連載のころの気分は残っていよう。

わたしとしては、この一冊に小さな天地を閉じこめたつもりである。

読者がさらに中国の古典、中国の風土文物へと足をすすめられるなら、この天地はいっそうひろがるにちがいない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

詩にみる茶のさまざま

1 喫茶のはじまり——『詩経』の詩・西晋の賦

唐代の詩に、けわしい山中にはいって、お茶の葉を摘んでくる苦しさをうたったものがある。そのことはちかごろになって知ったのであるが、その描写のぐあいからすると、茶の樹は野生しているもののようである。

お茶の葉というものは、茶畑で摘みとってくるものであり、その茶畑の茶の樹は、人間が人工的に栽培しているものだ——ということが、現代ではあたりまえのことになっている。しかし、考えてみれば、植物というものは、もともと野生なのである。お茶の樹とても例外ではない。だが、その採茶の詩が、唐代にうたわれているというところからすれば、茶を栽培する技術は、唐よりあと、ということになるのだろうか。

そもそも、お茶の歴史（お茶を飲む歴史）は、どのように変遷してきているのだろうか。

学生時代の恩師・青木正兒先生に「茶道入門　喫茶小史」という著作があり、そのみちびきをうけながら、喫茶史をふりかえることにしたい。ただし、いくらかは私見が加わることになる。（「喫茶小史」は『中華茶書』所収。また、『青木正兒全集』第八巻所収。いずれも春秋社）

青木正兒先生は、中国の喫茶は、前漢末期にはじまる、とされている。くわしくいえば、紀元前一世紀の終わり

ごろである。紀元前三世紀前半、秦の始皇帝の天下統一があり、そのあと項羽、劉邦の戦いがあって、漢が成立、武帝がおおいに武威を示した、その繁栄がややおとろえはじめたころのことである。

ただし、青木先生は、事実として認めることができるのは、という限定をおいて述べておられる。文献に記されるより以前に、風習がはじまるわけであるから、実際に、ひとびとが茶を生活にとりいれたのは、おそらく、それより一世紀か二世紀、あるいはそれよりもっとまえ、かもしれない。

なにの本で読んだか記憶はたしかでないが、『詩経』にみえる「茶」が茶のことだ、という説があるようである。

字典をみても、たしかに〝茶〟の意味があり、芽を早く採ったものをいう、とある。おそく採ったものは「茗」だ、という。

『詩経』は孔子が整理し教材とした書物で、収録の諸篇は紀元前十、もしくは九世紀から六世紀にわたってつくられたものである。そのひとつ「七月」は、内容からみてあきらかに、農村でうたわれた民謡であるが、その一節に「茶」がでてくる。

九月には苴を叔り
茶を采（採）り　樗を薪にし
我が農夫を食める

九月叔苴
采茶薪樗
食我農夫

この「茶」は、従来「苦菜」と解釈されてきた。字典をひいても、最初にあげられている字義は〝にがな〟であって、〝のげし〟〝けしあざみ〟ともいうらしい。字書では〝茶〟という字義は、その次にあげられている。

九月に採る、というのも、お茶らしくはないようである。

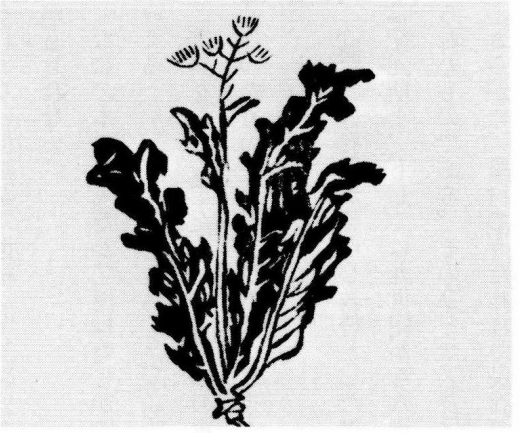
では、「茶」と〝茶〟はまったく無関係かというと、そうでもない。

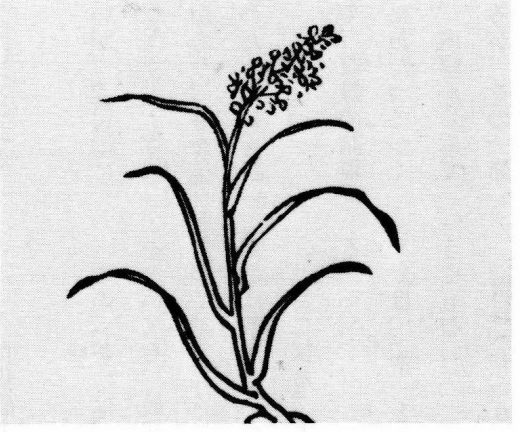
『爾雅』という中国最古の字書に（おそらく漢代の学者

が編集したものと考えられる）次のような一条がある。

檟（か）。苦茶（くと）なり。

さらに、これにつけられた後世の（唐代の）学者の説明（これを「釈文（しゃくもん）」という）、またさらに、その説明につけられた説明（「注」）は、次のとおりである。





茶（と）の図（写真右三枚）中国最古の古典である『詩経』にみえる植物・動物の実体をつきとめるのは、それだけでたいへんな仕事である。ここに示したのは『毛詩名物図説』にみえるもので、清朝の学者・徐雪樵が著わしたものである。原本は中国で刊行され、それをもとに文化五年(1808)、江戸で翻刻、その際、小野蘭山が和名を附した。『詩経』は漢代には四つの家によって伝承されていたが、そのなかでも毛氏の家のものが完全なかたちに近いので、毛家のテキストという意味で、「毛詩」と称されるようになった。

ところで、この『毛詩名物図説』では「茶」は三箇所に出現し、それぞれ、ノゲシ、ツバナ、タデという和名があてられている。『詩経』に収録されたそれぞれの詩の、それぞれの古い注を尊重した結果である。この図説のどこにも、茶（チャ）を宛てた植物はみあたらない。〔京都大学人文科学研究所所蔵〕

〔釈文〕茶は茗の類。

〔注〕樹は小さく、梔子のごとし。冬に葉を生ず。煮て羹として飲むべし。今、早く采りしものを呼びて茶となし、晩く取りしものを茗となす。一に荈と名づく。蜀人はこれを苦茶と名づく。

つまり、『爾雅』がつくられたころ、標準的な名称としては「檟」と呼ばれていたのであろう。そして、この『爾雅』は「茶」については、

茶。苦菜なり。

と記して、茶は〝草〟の分類にいれ、檟は〝木〟の分類にいれているのである。だが、右の注によると「冬に葉を生ず」とあって、季節的には、民謡の「七月」にうたわれている九月に近い。

わたしはおもうのであるが、現代になっても、植物でも動物でも、同一のものが、地方によって、まちまちの名称で呼ばれている。古代においては、方言のちがいは、もっとはなはだしいものがあったろう。それに統一をあたえようとしたのが、たとえば『爾雅』をつくった学者たちであった。かれらは、こんにち、われわれが〝茶〟と呼んでいる樹は、「檟」と呼ばれるのがふさわしいと考え、それについて、「蜀」で使われている〝苦茶〟という呼び方をつけておいた――のではないだろうか。

では、「蜀」のひとは、なぜ、こんにちの茶にあたるものを〝苦茶〟と呼んだのだろうか。茶はもともとにがいものである。〝苦い茶〟というのは、いかにも奇妙である。

わたしがおもうに、『詩経』の「七月」に、うたわれていた茶＝苦菜は、スープにして食用に供されていた。それで、いつしか、茶というと、スープ、われわれのいう〝汁〟のような意味になっていた。そこへ、新しく、茶がはいってきた。それで、これを〝苦茶〟、すなわち〝苦いスープ〟と呼ぶようになったのではないだろうか。すなわち、茶と苦茶はべつものである。

すでに述べたように、『詩経』の詩は、まことに古い。古いというからだけではないが、こんにちでは古典として扱われている。用語もむずかしく、権威がある。し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com